

社長所感（29年6月）

先日、京都の石清水八幡宮に参ってきました。

徒然草の「仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂くおぼえて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人徒歩よりまうでけり。……」の仁和寺の法師が徒歩で詣でたあの石清水八幡宮です。

私は、御室仁和寺から京福電鉄、JR、近鉄、京阪電車と乗り継いで1時間余りで、八幡市駅に到着しましたが、徒歩で行くと相当に歩きでのある行程と思われました。

その法師は「極楽寺、高良など（の末寺）を拝みて」、念願の石清水八幡宮の本殿への参拝がかなったと勘違いして「そも、参りたる人ごとに、山へ登りしは、何事かありけむ。ゆかしかりしかど、神に参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」と仁和寺に戻って同僚に話しましたが、私はその山へロープウェイで登って本殿にお参りしてきました。

帰りは、九十九折のような石段を歩いて八幡市駅まで下りましたが、20分近くかかりました。

ふもとから見上げますと、鬱蒼とした木々に覆われて、本殿の萱や鳥居などは全く見え、ある法師が単なる山と勘違いしたのもむべなるかなと実感することができました。

そう思うと、徒然草の話も俄然現実味を帯びて、数時間かけてわざわざ行きながら、単なる山と勘違いして本殿を拝まなかったのは本当にもったいないことと思われました。

交通至便な現代の私でもそう感じたのですから、当時の人は身をもってその法師の徒労を実感できたと思われます。

それ故にこそ、「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」という教訓が身に染みたことと思われます。危機管理の観点で言えば「思い込み」の戒めとなります。

同様に、徒然草には、仁和寺の僧が、興に乗って鼎をかぶって抜けなくなった話（危機管理で言えば、「はしゃぎ過ぎ」の戒めとなります。）や木登りの弟子が低いところまで下りてきた時点で注意をしたという高名の木登りの話（もう安心と緊張が緩んだ時点が危険という戒めです。）もあります。

このように、身近に実感できる面白い話で、しかも、聞いた後に何か考えさせるような教訓が残る話を説話といいます。

「歴史は、物語でなければ教訓にならない。」と言われていています。どんなに事実や数字を並べても、そこから教訓を引き出し、将来の行動に活かすためには、物語性が必要と言うことで、兼好法師が徒然草で語ったように説話にする必要があります。

近年、大きな事故や事件が発生すると、調査委員会や専門家委員会など設置され、原因究明に多大な労力が割かれます。膨大なデータが作成されますが、二度と同様な事件や事故を起こさないための的確な原因究明や教訓はなかなか出ないようです。

兼好法師のような説話づくりの名人、ストーリー・テラーが「あらまほしきことなり」と思う昨今です。